

ネパールの旧王都パタンにおける女性自助組織経営の展開

竹内 愛

キーワード

ネワール民族、農民カースト「ジャブ」、ジェンダー構造、女性自助組織「ミサ・プツァ」、経営

1. はじめに

筆者は、2003年から現在まで、ネパールのカトマンズ盆地に位置するネワール民族の旧王都パタンにおいて、ネワール女性の生き方の変容に焦点を当てて、文化人類学的調査をしてきた。パタンでは、1990年代に、NGOや地方行政によって女性の経済的自立を目指した女性自助組織「ミサ・プツァ」が設立、養成された。そのプロジェクトは一旦終了したが、その後、地元女性たちによって、自発的に、女性たち自身やトール（行政単位で、字に近い小規模のコミュニティ）のニーズに合わせた目的を持ったミサ・プツァが次々と設立されていった。2018年11月時点で、ミサ・プツァの行政登録数は300にまで増えている。これまで筆者のミサ・プツァ研究では、ミサ・プツァが設立されるようになってから、ネワール女性の生き方がどのように変化し、また、女性たちがトールにおいてどのような新たな役割を担い、ネワール社会の伝統的なジェンダー構造が変革されているかについての事象を解明してきた（竹内 2007a, 2007b, 2009a, 2013, Takeuchi 2013）。

組織の目的、活動内容等の変化に注目すると、1990年代に初めて養成された当時から現在までの約30年間において、ミサ・プツァの経営は、時代的に4つの特徴の異なる時期に区別することができる。筆者はそれらの4時期を、①1990年代の「草創期」、②2000年代前半の「内発的発展期」、③2006年から2009年の「経済中心期」、そして、④2010年代からは「内発的発展見直し期」と区分して、分析したい。また、2015年ネパール大地震以後は、震災復興という目的を持った新たな経営を始めていることから、④の時期はa（2010～2015年震災）とb（2015年震災以後）とに分けて検討したい。

Drucker（1998）は、組織のミッション（使命、到達目標）、リーダーシップ、マーケティング、資金源開拓、イノベーション、成果、リーダーのすべきこと、してはいけないこと等の項目から、非営利組織の経営の成功について論じている。組織論の中では、時間的な視点はイノベーションとして述べられる。Drucker（ibid.: 59-72）は、成功のための経営戦略の一つとして、外を見てイノベーションの機会を探すことの重要性について指摘している。しかし、ミサ・プツァは、ネワール社会という独特の社会背景の中では、会員である女性たち自身と、彼女たちが居住するトール（コミュニティ）内部のニーズに対応する面が強い。そして、そのニーズと活動の内容は、時間と共に変化する。したがって、ミサ・プツァの経

営を考える際には、現状の社会の複雑な要素の関係性と共に、時間軸による組織内部や女性たち自身の変化・変遷を考慮することでより深い分析が行える。従って、本稿では、長期的な視点で、ミサ・プツアの経営が、コミュニティ内部の他のアクターとの関わりの中でどのように展開しているかに着目して論じる。

なお、ミサ・プツアの活動はカースト集団によって多様であるため、特に、最も組織数が多く、活動の盛んな農民カースト「ジャブ」のミサ・プツアに焦点を当てる。

2. 旧王都パタンの伝統的な社会構造

2-1. ネワール民族とカースト制度

カトマンズ盆地に居住するネワール民族は、9世紀から18世紀半ばまでマッラ王朝を築いてきた人々の末裔である。旧王都パタンはカトマンズ盆地の3つの古い王都の一つであり、中世マッラ王朝期（1200–1689A.D.）に繁栄した。シャハ王朝のネパール統一、19世紀中葉のラーナ族の政権独占の過程で、ネワール民族はネパール国政の実権を大幅に失った。しかしながら、今日でも多くのネワール商人が盆地内外の経済を支配し、ネワールの高位カーストに属する一部の人々が学者、官吏等として、ネパール知識層のかなりの部分を占めている（Regmi 1993: 31-35）。

ネワール民族は、あらゆる事象を「浄・不浄」観によって捉える価値観を持っている（竹内 2010）。「浄・不浄」観とは、ヒンドゥー教が教える世界創造神話に由来し、人々の職業や儀礼上の役割を定めた「カースト制度」も、そのような「浄・不浄」観に基づいた世襲的な階級である。例えば、最も「浄」の存在は、神であり、神に近い存在であるブラーマン（僧侶）が高位カーストと位置づけられ、「不浄」とされる肉を扱う肉屋カーストや掃除カーストなどは低位カーストとされる。カーストによるランク付けはあっても、カースト集団毎に独自の「神格」、独自の「慣習」を持ち、それぞれ自分の属するカースト集団に対して「カースト・アイデンティティ」をもっている（Gellner 1996: 63-68）。「カースト」における序列と「浄・不浄」の程度は、個人の生まれによって決められるもので、基本的には固定したものだと考えられる。

パタンでは町の中心に位置する王宮が「浄」性が最も高いとされ、その付近には高位カーストが居住し、都の中心から周縁にいくほど「不浄」とされ、周縁部に低位カーストが居住している。つまり、パタンの街は、人々はカースト集団別にはほぼ同心円状に住み分けられている（マハラジャン 2002: 32-33, Gellner 1996: 48）。パタンの街だけで、そのカースト集団を表すタル（名字）は50を超えて存在する（マハラジャン2002: 35）。仏教には本来カースト制度はないが、ネワール社会では、仏教徒もカースト制度の内部に組み込まれている。各カースト集団の世帯数は、本稿で扱うジャブ（農民）が最も多く、バレ、グバジュ、続いてセショーとなっている。他のカースト集団の世帯数は多くない¹。

¹ 1940年のラリトプールの世帯調査では、ジャブ・クマー32.3%、バレ、グバジュ 21.3%、デョバルム、セショー18.4%、タモ等 3.5%、クサー、テペ 3.7%、プン、チパ、バー、サエ、ガトゥ、ナウ、カウ、クル、ドビを合わせると 4.5%、ナエ 3.5%、ジュギ 3.5%、ポー、チャムカラー1.3%であった（マハラジャン 2002: 41）。

伝統的に、異カースト間の関係は、特定の儀礼や祭祀の場では、複数のカースト集団が関わって行くが、それ以外は基本的には互いに距離を保ってきた。「カースト内婚」²に対する厳しい規範、下位のカーストと一緒に食事ができないなどの異カースト間の「食物授受の禁忌」³等がある。下位カーストから水や食物（特に、米）を受け取るとケガレが伝染すると考えられていた（山上 2001）。特に米飯は「日常的に口にする食物の中でも不浄性を伝達しやすいとされており、家族の成員以外とは食事の場さえも共有してはならないとされている」（山上 2008: 60）。結婚に関しては、お見合い結婚によるカースト内婚をしたり、恋愛結婚であっても、意識して同カースト内で相手を探すケースが大半であった。しかし、近年では、近代教育を受けた若者を中心として伝統的な価値観は薄れつつあり、カースト的規範は変化している⁴。さらに、震災後の2015年9月に新憲法が公布されたが、新たな憲法では、カースト差別が禁じられている。ただし、パタン社会の内部、とくに年長者にとっては、カーストの慣習は根強く残されている。

2-2. 農民カースト「ジャブ」

農民カースト「ジャブ」とは、農業を世襲的職業とする中位カースト集団であり、パタンの人口比率の約 38-40%を占めている（Gellner and Pradhan 1999: 159）。前述したように、パタンの街は伝統的にカースト別住み分けをしており、ジャブは、マッラ王朝期に街の周縁に設置されていた門付近の内部に居住させられ、外部から敵が攻めてきた場合には、兵士の役目を担っていた。現在でも、そのカースト別住み分けの基本は維持されている。

ネパール語で、「ジャ」は「仕事」、「プ」は「有能な」に由来しており、仕事は真面目で勤勉だが、教養がないため肉体労働しかできないという意味で、高位カーストの人々から差別的に使われてきた言葉である。従って「彼らはしばしば自分自身を『キサソ』」（ネパール語で、農家を意味する）として誇らしく言及することもある⁵。しかし、近年になって、敢えて「ジャブ」を自称しジャブの相互扶助組織「ジャブ・サマージ」を設立するなど、エンパワーメントを目指している（竹内 2009b: 110-111）。

2-3. ジャブ相互扶助組織「ジャブ・サマージ」

「ジャブ・サマージ」は、1994年、ジャブの社会的地位向上のために、創立されたジャブの相互扶助組織である（Toffin 2007: 374-377）。設立当時、ジャブの耕地は、依然として

² カーストの浄性を維持するため、異カースト集団との婚姻は慣習的に禁じられてきた。低位カーストの者が高位カーストの家に嫁ぐと、女性の皿は不浄であるため誰も洗うことができず、また、結婚式などの儀式時に必須とされる家の神への礼拝を行うこともできないという。

³ ネパール社会でも、食事、食べ物、対人接近、婚姻などに関する社会慣行には、けがれの観念が浸透し、カーストの存在と不可分なものとなっている。カースト間の上下序列、分離・反撥の面がはっきりみとれるのはやはりこれらの慣行においてである（石井 1975: 84-85）。伝統的に異カーストとの同席の食事はケガレが移るという理由からできなかった。

⁴ とくに、海外出稼ぎが非常に多く、結婚しても帰国しないケースが多いため、結婚相手が海外に留学・就職し、成功している場合には、カースト集団や民族を越えての結婚も良いと考えられるようになってきた。

⁵ 本稿ではジャブの名称で統一する。

ジャガダニと言われる地主の高位カーストのものであったため、国家へ土地の所有権を要求していた。1954年以前は、土地をもつジャブはほとんどおらず、ただの小作人であったため、ネパール政府は1954年に土地法改正をし、1996年の土地法改正で、ジャブは耕地の約50%の所有権を法的に獲得した。しかし、ジャブは識字率が低かったため書面作成の際にだまされることがよくあった。そこで、ジャブ・サマージはジャブの権利を守るために立ち上がった⁶。

前述したように、ジャブは高位カーストから虐げられてきた過去を持ち、その意識は現在でも強く、教育、経済、文化面での社会的上昇を目指している。ジャブ・サマージの2020年までのスローガンは、「ジャブの各家族から1人の大学卒業者をだそう」及び「ジャブ・コミュニティで家に籠っている人々に、仕事を与えよう」であった。そのためには、性別を問わず共に協力して発展していく風潮をつくるべきだとされてきた。

ジャブ・サマージは、ジャブ居住地の40のトール（トールとは、行政単位で、字に近い小さなコミュニティを指す。）に住むジャブの人々に対して、ジャブの伝統的な楽器や歌、踊りを教える文化保護活動、ネワール語教室、農業トレーニング、健康、教育などのサポートを行っている。また、ジャブの優秀な学生に対して、奨学金を出してサポートしている。

ネワール民族の新年祭では、伝統衣装を纏って街を一周歩くラリー（行進）が行われるが、ジャブの人々が大量参加し、ジャブが中心となって行われている。

従来、ジャブ・サマージは男性中心で運営されてきたが、近年、ミサ・プツァの会員の女性たちも祭に参加するようになり、他カースト集団の人々に対して、男女対等であることを示し、ジャブ・サマージの結束力と先進性をアピールしている⁷。

ジャブ・サマージの活動はジャブとしての出自を重視し、カースト集団内の相互扶助を促進しているが、「カースト・アイデンティティ」が強化され、むしろカースト間の差異の顕在化を起していると考えられる。

2-4. ネワール民族の伝統的な社会組織——男性儀礼執行組織「グティ」

ネワール民族の社会には、多くの年中行事や地域ごとの儀礼・祭祀があるが、ジャブ社会には、各トールに、その儀礼・祭祀執行等のために、男性のみを成員とした伝統的な儀礼執行組織「グティ」が多く存在する。グティには、明文化された規律は存在せず、年長者たちの意見が絶対である⁸。内部では、アズと呼ばれる5人の長老の発言は絶対的であり、それに逆らうことは許されない。年長者が非常に強い決定権を持っているために、グティの伝統は厳格に継承されている。「シ・グティ」は、一家の家長が必ず所属しなくてはならない組

⁶ 低位カースト集団の場合、カースト集団内の相互扶助組織は設立されているが、ジャブのような大きな運動は出来ていない。低位カーストは人口も少なく、ジャブよりも劣位に置かれてきたために、状況は厳しい。ジャブが成功したのは、他カーストにくらべ人口が多く、中位カーストであることが一因と考えられる。

⁷ 他カーストは祭にあまり参加せず、傍観している状態である。「ジャブは人数も多く、自分たちだけで楽しんでいる。他カーストは入ることができない。また、酒を飲んで歌い踊るのは迷惑だ。」と話す、他カースト人々もいる。

⁸ 2018年11月の筆者の調査によると、以前は、部外者に対して閉ざされた部分が多かったが、最近では、規定を作り、また、活動報告、会計報告も含めた年間報告書も作成しているグティもあり、徐々に外部に公開しつつある。

織であり (Toffin 2007: 296-301)、成員の家族が亡くなった場合に、協力して葬式を行う。その他にも、儀礼・祭祀の際に演奏する楽隊である「マンカー・グティ (マンカカラ)」、そして、毎月ブンガマティ村のラト・マチェンドラナートを崇拝するための「サンルー・グティ」などがあり、種類は非常に多い。男性たちは複数のグティに属すこともあり、多い人だと、5~6つのグティに属している男性もいる。この中で、ジャブ社会において最も力を持っているのが、マンカー・グティである。トールの問題は、このマンカー・グティが裁判・調停を行い、判決を下す⁹。一方、女性は伝統的に組織に加入することはできず、そこから排除されてきた。

収穫を終え、農閑期に入ると、ジャブ社会では、祭のための地域の楽団であるマンカー・グティが毎夜、楽器の練習を始める。楽隊の中心は、ジャブ特有の楽器であるディメ・バジャという太鼓である。マンカー・グティの会員は、祭の際には楽器を弾きにでかける。農閑期は時間的余裕があるので、祭が多くなる。祭では、人々は寺院に米、豆、肉、野菜、果物などを捧げる¹⁰。祭によっては、ヤギ、水牛などが生け贄にされる。

2-5. 伝統的なジェンダー構造

ジャブ女性は、高位カーストに比べると生活規範は厳格ではないが、家事、農業の肉体労働の役割を担い、男性に対して劣位に置かれている。ジェンダー関係は、男性はコミュニティの政治、儀礼など公的な場を取り仕切るのに対し、女性は公的な場から排除され、家族や親族という私的領域に生活範囲は限られてきた。

前述したように、ネワール民族は、「浄・不浄」観によってあらゆる物事を捉える価値観を持っており、「浄・不浄」観に基づく優劣の関係は、カーストと並んで、ジェンダーにおいても際立っている。カースト内部においては、女性は男性に対して劣位に置かれており、「浄・不浄」観、「父系出自」、「家父長制」、「長幼の序」、「ヒンドゥー教的女性観」等が複雑に絡み合った、厳格な「ジェンダー構造」が存在する。そのような中で、ネワール女性は厳しい序列規範を守って生活している。家族の中で、女性は男性に対して劣位とされる。ただし、「姉」という立場は弟を祝福する力を持つとされている。また、女性の位置づけは、固定的ではなく、「年齢」、「立場」、「状況」など女性自身のライフサイクルの中でも変化し、また、他者との関係性においても異なり、非常に複雑である (以下、竹内 2010: 20-22)。

例えば、初潮が訪れる前の少女は、クマリ (生き神) とされ、聖なる存在であるが、初潮を迎えると女性は「ケガレ」た存在となる。「娘」としての立場は、一家のラクシュミー女神として、大切にされる。結婚後、「嫁」の立場となると、嫁ぎ先では一家のラクシュミー女神とされる一方で、夫や夫の父系集団の親族に、献身的に仕えなくてはならない¹¹。嫁ぎ先では嫁の地位は低い、息子を産むことで地位が上がる。そして、その息子が嫁を迎え、

⁹ アズ (長老) が、ある一家に地域からの追放を命じれば、それに従わなくてはならない。ネパールの裁判所で勝利しても、トールの人々が納得いかない場合には、マンカー・グティで裁判をして全く異なる判決を下すことがある。

¹⁰ 祭には、お金と手間がたいへんかかるため、祭の数の多さは、ネワール社会がマツラ王朝期に裕福であったという過去を物語っている。

¹¹ 一方、他家に嫁いだ女性は、実家ではその地位が上がり、嫁いだ娘は実家に嫁いできた嫁たちよりも発言権が強い (竹内 2010: 20-21)。

姑の地位となると、家庭での地位を確立していく。一方、未亡人となると、不吉な存在として、祝いの席には出ることができなくなる。

以上のような「ジェンダー構造」は、日常的に親族内で行われる挨拶である「バギャティ」によって、体現される。バギャティとは、神仏像や人の両足に自己の額を接触させて行う挨拶の事であり、ネワール語で「尊敬する」という意味である。日常的にバギャティを行うことによって、女性は日々親族内における自分自身の地位を再確認させられる¹²。

また、伝統的な儀礼・祭祀において、プジャ（礼拝）の順序、座順等にも人々の地位が表れる。このバギャティや儀礼での順序等を通して、女性は、その地位を認識し、夫や夫の父系親族に対し、夫の長幼の序に準じた振る舞いをする。

また、女性の行動の他律性としては、家族・親族外においても、地域社会の「周りの目」がある。例えば、既婚女性としての身なり（装飾）やバギャティの挨拶などをきちんとこなさなくては、近所で悪い噂を立てられるため、女性は日常的な行動の逸脱は許されない。「周りの目」が、伝統的なジェンダー構造を維持する上で、重要な役割を果たしてきた。

3. 旧王都パタンにおける女性自助組織「ミサ・プツァ」の展開

3-1. 女性自助組織「ミサ・プツァ」とは

「ミサ・プツァ」とは、ネワール語で「女性・グループ」を意味する。1991年、地元 NGO がネワール民族の農民女性をターゲットにして、パタンに養成したのがはじまりである。パタン地域開発局 CDS (Community Development Section) でも、1996年から7つのミサ・プツァを養成し1999年に終了した¹³。プロジェクトが終了した後、ミサ・プツァについて知った女性たちが、各地で自発的にミサ・プツァを設立し始めた。そして、それぞれのツール、カースト集団のニーズに合わせて、女性の社会的、経済的なエンパワーメントを目指して活動を行ってきた。

女性たちは、独自にミサ・プツァを設立した後、CDS に組織登録をすることができる¹⁴。ただし、CDS への登録には要件があり、それを満たす必要がある。例えば、30人以上会員がいること、CDS で設立・運営のための1週間のトレーニングを受けること、毎年 CDS へ報告書を提出すること、リーダーは3年ごとに変えること等である。

ミサ・プツァを CDS に登録すると、女性たちにとって利点が多い。例えば、計算トレーニング、読み書きトレーニング、マシンによる裁縫や美容師養成などの職業トレーニング、人前で話すためのトレーニングなどの能力向上トレーニングを受けることができる、保健

¹² 「人の足はビトゥロ（不浄）であり、神に捧げる花に足が触れたり、またぐことで、食物の受け手にとってビトゥロとなり、食べることができない。神にとっても、食物の受け手にとっても、ビトゥロな足に故意に自己の最もチョコ（神聖）な部分（頭）をつけて行う挨拶が家族の中で行われる。ビトゥロである行為をわざと行って、社会的地位と地位の相違と、あるべき序列を明示している」（三瓶 1991: 395）。

¹³ ただし、現在も、CDS は、登録したグループに対して、様々なトレーニング等を行っている。

¹⁴ 既存のミサ・プツァの活動を模倣しながらも、あえて CDS には設立の登録をせずに、独自の目的を持って活動を行っているグループもある。それらについては、実際にいくつあるか行政側も把握しきれていない。

所から衛生指導や栄養指導が受けられる等である。また、活動報告書を作成し、CDS に提出すると、CDS から運営資金として毎年 7000 ルピーの補助金を受け取ることができる¹⁵。

続いて、「メンバーシップ」について述べる。本来、ミサ・プツァは、カースト集団毎に設立されるものではないが、女性たちはトールごとにミサ・プツァを設立しているため、カースト別住み分けをしているパタンでは、ミサ・プツァは、基本的に同カースト集団の者同士で構成されている¹⁶。各グループの会員は 30～150 人程度で、その大半は既婚の母親である。

2018 年 11 月時点で、パタン内部に 300 のミサ・プツァが存在している¹⁷。設立 20 年以上の長い歴史を持つグループもある。筆者が調査対象とした農民カースト「ジャブ」のミサ・プツァ数は、CDS 登録数の約 8 割を占め、活発に活動が行われている。

2000 年代頃までは、家族に家の外に出ることを反対されて、グループに参加できない女性も多かったが、2010 年代になると、どのトールにもミサ・プツァが設立され、ミサ・プツァの会員にならなければ、地域住民ではないという程にネワール社会に定着し、各家庭では、ミサ・プツァに家族のうち誰か一人は参加させるようになってきた。

表 1 は、CDS とミサ・プツァの歴史をまとめたものである。

1992 (2050)	パタンにコミュニティ開発局 (CDS) が設立される。
1996 (2054)	CDS がミサ・プツァ 2 つ養成 (11、17 区)。
1999 (2057)	Urban Management Program 開始。ミサ・プツァ 5 つ養成。
2000 (2058)	17、19、22 区に自発的にミサ・プツァが設立される。
	CDS が市役所から独立した建物になる (建物は日本 NGO 援助)。
2004 (2061)	CDS 登録のミサ・プツァ総数が 45 になる。
	18 ヶ月間の Clean Kathmandu Valley Program (JICA) 開始。
	Health program (America United Mission による) 開始される。 Public Health Section ができ、18 区に 5 歳以下の子どもたちの無料診療室をつくる。
2005 (2062)	新しいミサ・プツァに 1 週間の運営トレーニング実施を開始。
	CDS 登録のミサ・プツァ総数が 54 になる。
2007 (2064)	CDS 登録のミサ・プツァ総数が 87 になる。
	優良なミサ・プツァに対して表彰制度を導入。

¹⁵ 従来は 5000 ルピーだったが、ミサ・プツァの会員が嘆願し、2018 年から年 7000 ルピーの補助金となった

¹⁶ 近年、町には空き家を異カーストや異民族に貸しているケースもあり、そのようなトールでは、異カースト混在のグループもある。しかし、基本的には、同一のカースト集団が多数をしめ、異カーストの会員は少数派という図式になっている。

¹⁷ Community Development Section (CDS) からの聞き取りによる (2018 年 11 月筆者フィールドワーク)。

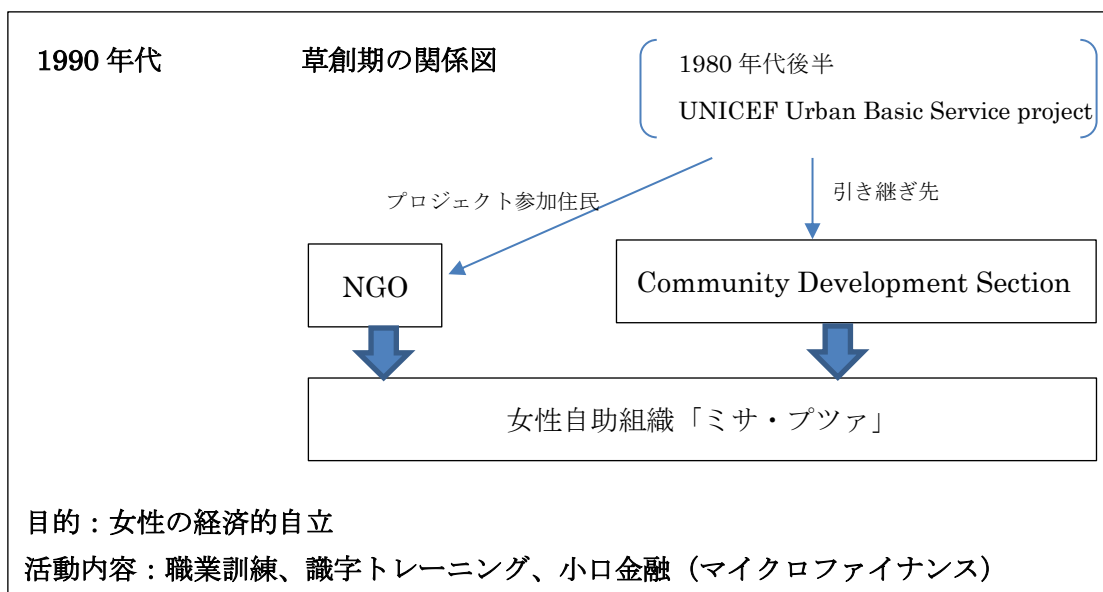
2008 (2065)	CDS 登録のミサ・プツァ総数が 102 になる。
2009 (2066)	CDS 登録のミサ・プツァ総数が 113 になる。
2010 (2067)	CDS 登録のミサ・プツァ総数が 118 になる (11 月時点)。
2015 (2072)	CDS 登録のミサ・プツァ総数が 178 になる (11 月時点)。
2018 (2075)	CDS 登録のミサ・プツァ総数が 300 になる (11 月時点)。

表1 CDS と女性自助組織「ミサ・プツァ」の歴史

3-2. 1990年代～2010年代の女性自助組織「ミサ・プツァ」の経営——4つの活動区分

以下では、農民カースト「ジャプ」の女性自助組織「ミサ・プツァ」の活動を①「草創期」、②「内発的発展期」、③「経済中心期」、④「内発的発展見直し期」と4つの時期に区分して、概観していく。

①「草創期」：NGO、地方行政主導型のミサ・プツァ



1980年代後半、パタンにおいて UNICEF による貧困削減のための社会開発として、UBS (Urban Basic Service) プログラムが3年間実施された。その後、2年間のフォローアップと合わせ、計5年間でプロジェクトは終了した。このプロジェクトに従事していた住民は、地元の発展のために活動を継続させたいと考え、パタンに NGO を創立した。そして、1992年、初めてパタンに「女性の経済的自立」を目的としてミサ・プツァを設立した。NGO は、その後一旦養成事業を停止したが、1996年に貧困層の居住地に3グループを設立した。

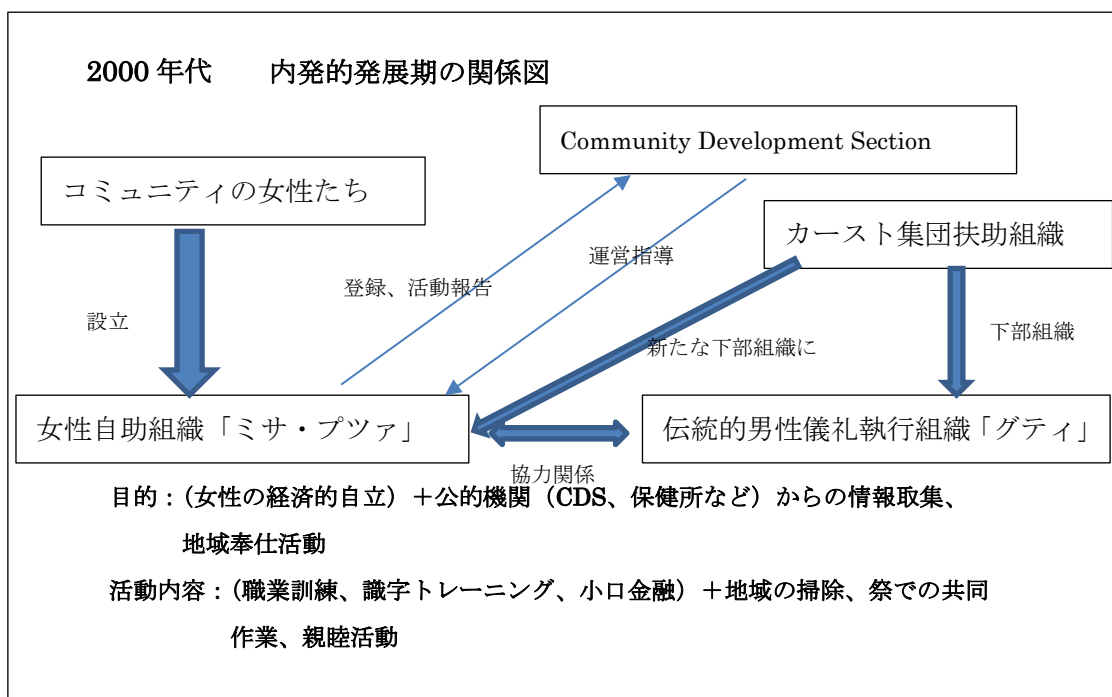
一方、1992年に、CDS (Community Development Section) が、職業トレーニング等、UBSプログラムの引き継ぎ先として設立された。そして、CDSは、パタンの各家庭へのトイレ設置と寺院改修等を目的とした Urban Management Programの一環として、1998-

1999年に貧困層の居住する4つのワード(区)に5つのミサ・プツァを養成した¹⁸。そのミサ・プツァ養成プロジェクトは、CDS職員の出身トールを中心として行われた。養成プロジェクトは終了し、CDSでは、ミサ・プツァの運営維持のために、ミーティングに職員たちが付き添い、相談役を引き受けて、トールの女性たちを指導するという形態で活動が維持されていった。

以上のように、草創期のミサ・プツァは、NGO、CDSの指導の下で設立された。活動は、外部からの開発モデルに従って、女性の経済的自立という目標を達成するために、「マイクロ・ファイナンス」、「職業トレーニング」、「識字教育」の3つを中心に行われた。ミサ・プツァのマイクロ・ファイナンス¹⁹は、グラミン式とは全く異なり、会員の女性たちがグループ基金をゼロから貯めて、ある程度基金を大きくし、女性の起業のために利子をつけて貸し出すという仕組みを取った。

草創期のミサ・プツァは、女性の経済的自立を目的に、NGOとCDSが主導したものであり、外部の開発モデルに合わせ、女性の経済的自立を目標とした。しかし、実際には、起業のできる女性は極めて限られており、女性の経済的自立という目標の達成は困難であった。

②「内発的発展期」：女性、地域のニーズに合わせ、内発的に設立されたミサ・プツァ



¹⁸ ミサ・プツァの養成地域としては、声をかけやすいという理由から、CDSの職員たちの出身地と嫁ぎ先が選ばれた(ピンチェン、ガーチェン、ルクシリ、パタンドカ、チャーサル)。CDS職員は、全員が農民カースト(マハルジャン)であったため、マハルジャンの居住地(40トール)から徐々に自発的にミサ・プツァの設立が始まり、その後、サキヤ、シュレスタ等の他のカーストの居住地でもミサ・プツァが設立されていった。

¹⁹ 雨森(2010:66)によれば、「世界的に、低所得者層向けに小規模金融サービスの提供を行うマイクロ・ファイナンスは、バングラデシュやインドなど南アジアだけでなく東南アジアでも広く普及しており、貧困緩和に貢献するものとして注目されている。その組織形態はかつての日本の頼母子講のようなものから大規模な金融機関にいたるまでさまざまであり、営利・非営利、あるいは政府・民間を問わず広がっている。」

パタンの女性たちは、この草創期のミサ・プツァについて知り、1990年代末から2000年代に、各地で自発的にミサ・プツァを設立しはじめた²⁰。そして、次に述べるように、これまでの開発のフォーマルな活動に加えて、女性たちや地域の戦略的ニーズに合わせて多様な活動を行い始めた。それによって、ミサ・プツァによって女性たちの生活世界が明らかに広がっていった。

従来、女性の生活世界は基本的に自分の生家のトールと嫁ぎ先のトールという狭い世界がすべてであった。パタンには、前述した伝統的なジェンダー構造が存在するため、当初は、女性が活動に参加することに対して、男性の抵抗感が非常に強かった。ミサ・プツァの会合に行こうとすると、舅や夫から行く必要はないと止められるという家庭があるという話をよく聞いた²¹。しかし、ミサ・プツァの利点が知られるようになると、各トールに次々と設立されていった²²。

ミサ・プツァ参加の利点としては、ミーティングに行くと、女性たちが行政から様々な情報を入手できることや、衛生やゴミの分別やリサイクル方法を学んで、それを家庭で実践するなどの実利的な面がある。必要に応じて、マイクロ・ファイナンスによって家計を助けることもできる。また、選挙の時期になると、行政職員が各ミサ・プツァを訪れ、政党とは何か、市民が投票をする意味、選挙方法などについてのレクチャーをするため、会員は、政治参加の知識を持つ機会が得られる。選挙の立候補者は、各トールで集会を開くことが多いが、そこにミサ・プツァを招待するというこゝもしばしば行われるようになった。

このように、ミサ・プツァを通して地域や各家庭に行政からの役立つ情報等が入ってくる

²⁰ 筆者の2006年調査時点では、会計能力のある会員がいないということで、男性もミサ・プツァの正式な会員となって会計役を行っているグループがあったり、また、文字を書いたり、計算能力のある会員がいないということで、小学校に通う自分の子どもたちに書記と会計を手伝ってもらっているグループもあったり、ミーティングは女性たちによって行われているけれども、集会場の背後に男性たちがずっと見物しているなどの状況にあるグループもあった。つまり、教育を受けたことのない女性たちのグループでは、設立当時の組織経営は、周りのサポートがないと成り立たないケースも一部で見られた。

²¹ 筆者が、ある農民カーストの会員(40代)に、ミサ・プツァの活動に家族の賛同があったかどうかインタビューしたところ、次の回答を得た。

「夫や舅は、ミサ・プツァに参加することには賛成ではありませんでした。何かを計画するミーティングがあると、『また行くの?なぜそんなに頻繁に行かないといけないの?家族のことはどうするの?』とミーティングに行く度に言われました。預金する日に、夫に、『預金代50ルピーを下さい』と言っても、『今はお金がない』と言われてしまうこともしばしばあったので、毎月50ルピーの預金のために、前々から自分で残しておくようになりました。

それでも、入会当初は、子どもが小さかったので、チョコレートを買ってほしいと言われて、手元にお金が全くなくなる時もある時があって、そういう時は、親しい会員から50ルピー借りて、ミーティングに持って行く日もよくありました。他の会員も同様の状況でしたが、そうやってみんなで助け合っていました。」

²² 実家と嫁ぎ先の2つのトール内のことについてはすぐに女性たちの耳に入る。自分の生家のあるトールにはミサ・プツァがあるが、嫁ぎ先のトールにはないという場合、生家にあるトールのミサ・プツァの話を嫁ぎ先のトールで女性たちに声を掛けて、生家のあるトールのミサ・プツァを真似して嫁ぎ先のトールでもミサ・プツァの設立をするという具合に広まっていった。

ようになり、また、地域で奉仕活動も行われるようになり、その利点が理解されはじめ、夫や家族も、女性たちがミサ・プツァへの参加をすることを以前よりも好意的に受け入れるようになり、ミサ・プツァが地域に定着していった。最近では、トールにミサ・プツァがないと、トールの男性儀礼組織のイニシアティブによってミサ・プツァが設立されることもしばしばある。従って、今まで妻の入会を反対していた男性たちが、むしろ、ミサ・プツァに入会するように勧めるようになったケースも出てきた。ミサ・プツァをトールに設立するように勧めていた男性たちから、「車は両輪ないと走れないでしょう。男性だけではコミュニティは良くならない。男性と女性の協力が大切だ。」という話が出てくるようになり、伝統的なジェンダー意識が変化している。

すでに述べたように、ミサ・プツァは、地域行政の CDS に登録することによって、その後、毎年、運営費の助成が受けられたり、CDS から様々なトレーニングを受けることが可能となる。

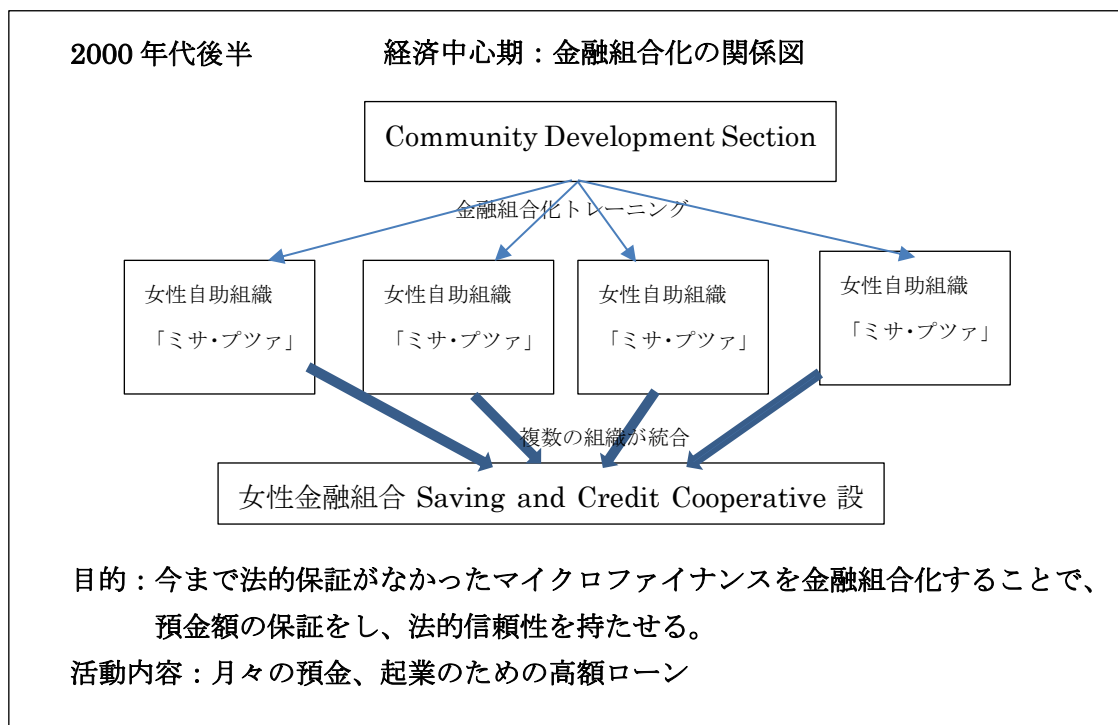
農民カースト「ジャプ」のミサ・プツァは、ジャプ相互扶助組織「ジャプ・サマージ」との関係も強い。ジャプ・サマージは、ミサ・プツァの存在を知ると、ジャプの居住する 40 トールすべてに、ミサ・プツァを設立するように要請した。ジャプ・サマージとしては、各トールの女性たちの問題をミサ・プツァを通して知り、女性たちへの連絡事項をミサ・プツァを通して知らせることも可能となり、都合が良かったのである。一方、女性たちとしては、ジャプ社会ではジャプ・サマージの権威は非常に強いため、ジャプ・サマージが後ろ盾となってくれることで、トールでの活動がしやすくなるという利点があった。ミサ・プツァのリーダーには、男性儀礼執行組織「グティ」の会長の妻になることが多く、グティからのサポートやアドバイスも得ながら活動を行っていった。

「内発的発展期」では、女性たちは、ミサ・プツァの女性たちが自発的に始めた開発本来の目的ではない「派生的な活動」に意義を見出し、内発的にグループを各地に設立し、積極的に活動してきた。取り組む内容は限定されておらず、女性たち自身が意見を出し合って決めていた。例えば、ミサ・プツァの女性たちは、ヒンドゥー教の大祭ダサインで、バザーを出店するなど、「伝統的儀礼祭祀」にも参加し、祭での「共同作業」をするようになった。会員間の親睦を深めるために、合唱、遠足、茶会、宴会などの「親睦活動」も積極的に行われており、グループに僧侶を招いて説教会を開催し、宗教的教養を身につけたり、ヨガ教室を行い、健康維持活動を行う等のカルチャーセンターのような役割も果たしている。コミュニティに月1回医師を呼んで簡易クリニックを運営しているグループもある。その派生的な活動の詳細については他稿で記述した (Takeuchi 2012, 2013)。

「内発的発展期」では、「草創期」から行われてきた女性のための開発本来の活動の「マイクロ・ファイナンス」、「職業トレーニング」を継続しているが、マイクロ・ファイナンスは、掛け金が少額でローンも少額しか融資ができないなどの理由から、女性の小規模ビジネス起業はほとんどうまくいかなかった。そこで、女性たちは、マイクロ・ファイナンスに本来とは別の意味を見出し、病院代や子どもの学費などの突発的な金銭が必要な時に借りるというように、女性のニーズに合わせて利用方法が変えられていった²³。

²³ 事例として、Pr ミサ・プツァのマイクロ・ファイナンスについて紹介する。Pr ミサ・プツァでは、各会員は毎月最低 100 ルピー以上を預金することになっている。会員は、年に 5

③ 「経済重視期」：「金融組合」化するミサ・プツァ



2000年代後半になって、外部の指導により、多くのミサ・プツァには、「金融組合」(saving and credit cooperatives) 設立のためのトレーニングが行われ、多くのミサ・プツァが合併して金融組合が設立された。金融組合とは、マイクロ・ファイナンスを発展させ、会員女性への融資額の拡大と法的信用性をもたせることを目的としている。女性たちは、金融組合に加入すれば、マイクロ・ファイナンスよりも多額の融資を受けることができるようになり、小規模ビジネス起業の資金にすることができると聞き、多くのミサ・プツァが急速に金融組合化したのである²⁴。

ミサ・プツァの金融組合化を推し進めたのは、CDS、NGO であり、ミサ・プツァ向けに、金融組合の設立・運営トレーニングをし始め、女性たちは、そのトレーニングを受けて誘導されたことで、金融組合化をしていった。2006年、LUMANTI (NGO) によって、はじめてミサ・プツァが金融組合化された。2008年以後、2010年11月までに CDS、SOUP (NGO) の指導の下、複数のミサ・プツァが再編され、6つの金融組合が設立された。それらは、すべて NGO または CDS が、設立から経営まで関わっている。

万ルピーの融資を受けることができ、6か月で借り換えで、利率は10%。3年連続なら15万ルピー借りることができるが、保証人が3人必要となる。会員には、会員自身や会員の夫の仕事の資金(多くは、商店の商品仕入れ)のため、子どもの学費、病院代、結婚費用等の理由のために、グループ基金からの融資も行っている。

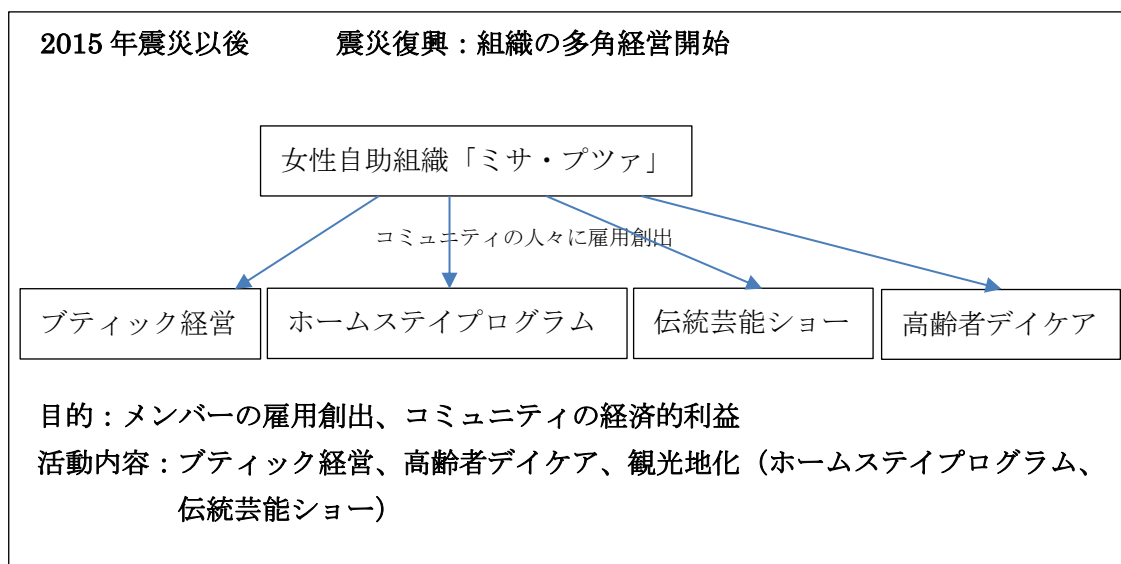
²⁴ ミサ・プツァによっては、「金融組合設立のためのトレーニングを受ける時間がない」、「金融組合になると、多くのミサ・プツァが合併するため、今までのミサ・プツァではなくなってしまって、自由な活動ができなくなるから金融組合化はしない」など、金融組合化に積極的ではないグループも存在している。

草創期、内発的発展期を経ても、女性の経済的自立が達成されていないと判断した NGO や CDS は、経済面に特化した相互扶助を目的として、2007 年から金融組合設立に向けて動きだし、そのための訓練を女性たちに対して無料で提供した。ところが、ネパールで金融組合の不正が多発したことで、金融組合に関する法律が変更され、金融組合設立が難しくなったため、CDS では 2010 年代から金融組合設立トレーニングは行わなくなった。

この金融組合の融資を利用して小規模ビジネスの起業を始める会員の女性たちも出てきたが、大多数の女性は「預金の利子」を目的として利用している。複数のミサ・プツァが合同して設立された金融組合では、金融組合の支部としてグループ毎に独立してこれまでの活動を継続しているものもあるが、金融組合が成立したことで、ミサ・プツァ自体が消滅してしまったグループもある。金融組合化したグループでは、女性の自助活動が「地域的な活動」よりも「経済的な活動」、とくに「投資」（預金による利息を期待する）にシフトしていった。

金融組合の共通した問題点としては、ミサ・プツァが金融組合化してからは、個人の「投資」が中心になったことで、集団活動が衰退していったことであつた²⁵。その要因は、「金融組合」化したことで会員の人数が多くなり、毎月会員が全員揃ったミーティングができなくなったことなどが挙げられる（会員の連絡は文書による回覧になった）。さらに、他の問題点としては、一部のビジネス能力のある女性は、金融組合に就職し、給料の支払われる有給スタッフになったり、自分でビジネスを始めることのできた女性もいる。しかし、結局ほとんどの女性は、雇用促進につながっているとは言えない。そのことで、女性間の格差の拡大が発生した。

④ 内発的発展期見直し期：創造的復興を目指すミサ・プツァ



「経済中心期」に、ミサ・プツァが急激に統合されて「金融組合」化されていったが、ネパール国内で様々な不正が発生し、法改正がなされてからは、パタンでは金融組合設立の動

²⁵ 一部の金融組合では、各ミサ・プツァのいさかいの仲裁役も担ったり、各ミサ・プツァへ栄養トレーニングの派遣を行ったりしているものもある。

きはなくなり、NGO・CDS 主導で行われていた金融組合化トレーニングは行われなくなった。女性たちも、金融組合化してから今までのように、会員が顔を合わせる機会がなくなり、様々な共同作業がなくなったことに不満を持つ女性たちが出てきた。そして、再度、「内発的発展期」にあったミサ・プツァの形態が見直されることになった。つまり、多くの女性たちは、経済活動ではない多様な活動を必要としたのである。

2015年4月25日にネパールで大地震が発生し、パタンでも建築物が倒壊したり、死者が出たりと大きな被害が出た。数ヶ月間に亘って、余震が続き、多くの人々は2ヶ月間は外に簡易テントを張ってそこで寝泊まりした。多くの学校は震災後、2ヶ月間休校となったという。一方、家庭の外で働いている男性らは、毎日職場へ顔を出す程度で、「また地震が来るのでは」との不安から、2ヶ月間は早めに帰宅することが多かったという。従って、震災後の女性たちは、家族がずっと一緒にいるので、今まで以上に家族の世話、家事に追われて生活は大変であったという。家から出てミサ・プツァの活動をする余裕はなかったという。

従って、震災から数ヶ月経ってから、徐々に、ミサ・プツァの会員たちも崩れた家の煉瓦を片付けたり、倒壊寸前の建物に衝立を立てたり、道を直すなどの作業を男性とともに本格的に協力して行うようになったという。そして、2017年頃からは、パタンの複数のトールでミサ・プツァの女性たちが、コミュニティの持続的な復興を目指して、コミュニティの文化、人材を活用し、「観光」やその他の事業を始め、コミュニティに雇用を生み出そうとしている(竹内2018)。

例えば、チケット制の伝統音楽、伝統舞踊、ネワール式の食事が楽しめるイベントを開催し、利益を上げている。他にも、街全体を観光地化する計画が持ち上がり、女性たちは伝統舞踊のトレーニングを受けているトールもあり、トール全体の復興を目指している。

現在このような大きな事業が成し遂げられているのは、まず、ミサ・プツァが長年の活動を通して様々な経験を積んで、女性たちの計画能力、経営能力が高まっていることが挙げられる。そして、ミサ・プツァの活動によって長年築いてきた会員間の強い絆、様々な横のつながりがあり、それらを生かして、確実に活動を進めている。さらに、コミュニティにおいてミサ・プツァが頼り甲斐のある存在となっていて、コミュニティの住民はミサ・プツァの活動に協力的な人が多いという点が挙げられる。

4. 考察

Druckerは、非営利組織はミッション²⁶のために存在する。それは社会を変え、人を変えるために存在する(Drucker 1998: 45)と論じている。つまり、各組織は、組織の目標、目的を実現するという経営課題がある。もう一つは、資金源を開拓するという組織自体の維持という経営課題である。ミサ・プツァもこの2つの課題に向き合っている。そこで、本章では、ミサ・プツァを「ミッション実現のための動向」と「組織維持のための運営資金獲得の模索」という2つの課題の面から考察していく。

²⁶ ミッションは、使命と訳されることが多いが、組織が達成しようとしている究極の目標である(田尾 2005: 110)。

4-1. 女性自助組織「ミサ・プツァ」の4時期における経営

前述したように、ミサ・プツァは、1990年代から現在までの約30年間に、パタン各地で地元の女性たちによって自発的に設立され、その数を着実に増やしてきた。グループの活動は、一様ではなく、グループ毎の会員の属するカースト集団、トールや女性たちの抱えているニーズによって多様である。筆者が調査を続けていると、パタン内部に設立されたミサ・プツァをおおよそ4つの活動内容に区分することができた。ここでは、ミサ・プツァの活動を横軸の社会関係性だけでなく、縦の時間軸の視点で、経営の動向をみていきたい。

①1990年代の「草創期」は、Women in Development や Gender and Development という国際開発の潮流の下、パタンでも推し進められた、個々の女性の経済的自立のための社会開発の時期である。行政やNGOがリーダーシップを発揮し、ミサ・プツァの会員の女性たちに「マイクロ・クレジット」、「職業訓練」、「識字教育」を行っていた。

②2000年代の「内発的発展期」は、行政やNGOの養成プロジェクトは終了し、各トールで、地元の女性たちによって自発的に独創的なグループが形成され、多様な目的が設定されて活動がなされた時期である。この時期から、ミサ・プツァの派生的な活動が活発となり、女性たちの生活圏が大きく広がり、女性たちの絆が形成され、地域の多様な社会的機能を果たすようになった。それまで、地域のコミュニティは、家族(大家族)、親族のシステムによって、男性たちによって運営されてきたが、そこに女性たちが大きく関与するようになったのである。

ミサ・プツァは、コミュニティを基盤としたグループであり、男性組織グティのようなカースト集団を基盤としている組織ではないため、コミュニティ内でカーストを超えたいさかいが起こった場合の仲裁役を担うことができている(実際にはカースト別に住み分けているため、コミュニティは概ねカースト集団と重なっている)。そのため、現在、ミサ・プツァは、コミュニティにおいて(男性たちが果たせない)重要な役割を担っている。

女性たちは、ミサ・プツァという組織として、社会奉仕活動や協働作業を共に行うことによって、徐々に男性たちからも認められてきた。個々人ではなく、女性が結束して活動をするという開発手法が、女性たちの力を発揮させ、エンパワーメントを果たすことが可能となっている²⁷。前述したようなミサ・プツァのインフォーマルな活動は、女性の生活世界を大きく広げ、さらには、意図せずして、コミュニティ内の「ジェンダー構造」をも変革しつつある。

③2006～2009年頃の「経済中心期」には、再び外部の指導により、多くのミサ・プツァには、「金融組合」(saving and credit cooperatives) 設立のためのトレーニングが行われ、多くのミサ・プツァが合併して金融組合が設立された。行政職員に「ミサ・プツァが行ってきたマイクロ・ファイナンスは、開発本来の目的(女性たちの経済的自立のための起業)にはほとんど結びついておらず、うまくいっていない」と結論づけられ、ミサ・プツァが急速に統合され、「金融組合」(saving and credit cooperatives) 化されていった時期である。金融組合は、ネパール全体で不正が多発したことなどにより法改正があり、設立が難しくなり、

²⁷ ミサ・プツァに参加して一番良かったことについてインタビューしたところ、「結婚当初は地域の人々の顔は知っていても話したこともなかったのですが、入会してからは、日常的によく話すようになりました。会員は、年齢差はとても大きいですが、家族のように感じています。」と、会員間の絆ができたことに喜びを見出している。

	社会背景	目的	中心的な活動	外部との関係
①草創期： 1990年代	契機：USB プロジェクトの終了による住民のソーシャルワーク意識向上	女性の経済的自立	・マイクロファイナンス（預金と融資） ・職業訓練 ・識字訓練	①NGO ②CDS
②内発的発展期：地域活動中心 2000年代	契機：女性たちが、自分たちのツールにも女性自助組織を望んだ。	地域のニーズを解決	・マイクロファイナンス ・地域奉仕活動 ・祭での共同作業 ・親睦活動	①CDS ②地元男性組織「グティ」 ③カースト集団扶助組織「ジャブ・サマージ」
③経済中心期：金融組合化 2006～2009頃	契機：CDS 職員のマイクロファイナンス失敗の判断。ネパール全土のインフレ。バブル経済。	女性の経済的自立	・金融組合へ個人の預金活動 ・融資を受ける	①NGO ②CDS
④a 内発的発展期見直し期： 2010年代～	契機：ネパール国内で金融組合経営の不正が発生し、法改正が行われた。	地域のニーズを解決	・マイクロファイナンス ・地域奉仕活動 ・祭での共同作業 ・親睦活動	①CDS ②地元男性組織「グティ」 ③カースト集団扶助組織「ジャブ・サマージ」
④b 内発的発展期見直し期： 2017年～	契機：2015年大地震直後、パタンでは公的援助が欠如。その後も、公的援助は不十分。	地域のニーズを解決（住民のための雇用創出）	・マイクロファイナンス ・コミュニティ内部に事業（観光など）を生み出す。	①CDS ②地元男性組織「グティ」 ③カースト集団扶助組織「ジャブ・サマージ」

表2 ミサ・プツァ経営の変遷

ミサ・プツァ全てを金融組合化する行政側の計画はストップした。金融組合化が終了したのは、法改正という要因だけでなく、外部的視点による「開発本来の目的」が、地域の女性たちのニーズや、カースト制、ジェンダー構造などの社会背景に適合しなかったことが指摘できる。

最後に、再び、ツールのための多様な活動が再評価され、④「内発的発展期見直し期」となり、各地で、「内発的発展期」の形態のミサ・プツァが盛んに設立されている。また、2015年に発生したネパール大地震以降は、ツール復興において、ミサ・プツァの役割が重要となっている。震災によってツールの建物、多くの人々が被災したが、ツール復興のために、ネワール様式の建物、舞踊、楽器、食事など「伝統」を生かした観光業をツール全体で行おうとし、住民の平等なビジネス機会を探ろうと努力しており、2019年現在もその流れにある。

もちろん、ミサ・プツァによって設立時期も異なっており、すべてのミサ・プツァが4つの時期を経ているのではないが、行政の方針変化、ツールや女性たち自身のニーズ、自然災害等を受けて、ミサ・プツァはその特徴を柔軟に変質させてきた。

4-2. 女性自助組織「ミサ・プツァ」の経営に関する分析

表2で、4つの時期の「社会背景（活動変容の契機）」、「目的」、「中心的な活動」、そして、「外部との関係」の4点から整理を行った。その作業によって、明らかになったことは、次の4点である。

- i) 主体である女性側のニーズや意思を反映しない組織目的・活動はうまくいかない。
- ii) 組織経営は、コミュニティの他の組織との関わりが重要となった。
- iii) 内発的な自助組織の活動により、女性の生活圏が大きく拡大し、会員間の絆が強まり、意思伝達がしやすい状態となった。また、地域への強い奉仕意識が生まれ、さらに、副次的効果として、ネパール社会のジェンダー構造が変容し、女性の発言権・社会的地位が向上した。
- iv) 女性たちが、震災復興においてトールの中心となって独創的な事業を生み出すにまで成長したのは、約 20 年の内発的な自助組織の活動経験の産物である。

4-2-1. 自助組織における外部の開発モデルと主体たる女性や地域のニーズ

ミサ・プツァの経営は、大きく分けて、開発モデルを持った「女性の地位向上・経済的自立」というミッション（目的）を持った「地方行政・NGO」からのアイデアを強く受けている時期（表 2-①、表 2-③）と、地元の女性やトールのニーズを解決したいという使命感を持った時期（表 2-②、表 2-④）の 2 つがある。つまり、「地方行政・NGO」型のミサ・プツァは開発モデルに合わせて、女性たちの経済的自立を目指す活動を行った。しかし、表 2-①、表 2-③の時期に、ビジネスを開始するという発想に追いつけなかった女性たちがほとんどであった。ビジネスを始められない女性たちは、女性たち自身の喫緊のニーズを満たすことにこそ強い関心を持っており、経営を独自の仕組みに作り替えた。組織を社会的に受け入れてもらうために、外部からの支持を必要とし、トールに受け入れられる努力（地域活動、男性組織への金銭的サポート）をしつつ、自分たちの望む活動（娯楽、共同作業、親睦活動）をすることで内発的発展を遂げていく。「内発的発展型」のミサ・プツァ（表 2-②、表 2-④）では、社会変化やそれに伴って発生するトールや女性たち自身のニーズに合わせた活動をしている。具体的には、表 2-②の「内発的発展期」では、開発本来の活動よりも、地域奉仕活動、共同作業、娯楽・親睦活動など派生的な活動を積極的に行うようになった。表 2-④b の 2015 年ネパール大地震発生後は、パタンでも震災による被害が発生したが、震源地に近い郊外に比べて、被害が少なかったため、行政や外部からの援助が少なく、トールで助け合って復旧・復興を進めていくしかないという状況に置かれたことが契機となり、ミサ・プツァが中心となって、トールに様々な事業を生み出して、会員を含めた住民の雇用を創出しようとしている。

開発理念を掲げた「地方行政・NGO」型のミサ・プツァ（表 2-①、表 2-③）と女性・コミュニティ（トール）ベースの発想で活動するミサ・プツァ（表 2-②、表 2-④）のズレが発生する理由は、会員が、高齢の女性たちが多いために、個人個人のビジネス能力（読み書き計算能力、経営能力）を養うことが難しいだけでなく、ビジネス起業の発想がそもそもない人がほとんどであったことが最も大きい。さらに、カースト・アイデンティティも強く、基盤となるトールが台頭することを望んでいる。

4-2-2. 組織経営における外部の組織との関わり

ミサ・プツァは様々な既存の組織とネットワークを築いており、それらによって、経営の支持、サポートを得、逆に、ミサ・プツァがサポートも行っている。地方行政や NGO とのつながりだけでなく、そのネットワークには、農民相互扶助組織「ジャブ・サマージ」や各

トールに存在する男性儀礼執行組織「グティ」といった伝統的なジャブ社会組織とも繋がっており、むしろ伝統社会に支持されていることが女性たちにとっては重要な意味を持っている。ミサ・プツァは比較的新しい組織であり、社会で安定的な地位を得るために、既存の男性組織とつながりを持ち、相互に利益がある活動に取り組んでいる。

なぜならば、「草創期」や「内発的発展期」の初期は、女性が家庭から出て外で活動することは女性自助組織を設立もしくは参加したくても家族の反対が強くてできない女性が多かった。そうした状況下で、ジャブ・サマージが、農民の居住する40の各トールに必ずミサ・プツァを設立するよう要請し、ミサ・プツァを下部組織として取り込み、ミサ・プツァからジャブ・サマージの女性委員会の役員を選出した。これにより、家族の反対があった女性たちもミサ・プツァに参加できるようになった。一方で、ジャブ・サマージにとっては、各トールで発生している問題の把握や、各トールへの連絡事項の伝達が、ミサ・プツァの女性たちを通すことで、容易となった。

また、それぞれのトールにおいて、ミサ・プツァは、既存の男性儀礼執行組織グティと友好的な協力関係を築いた。例えば、グティの仕事の補助役を担ったり、グティの宴会費を寄付したり、グティの建物設立のため、建設費の一部を提供することもある。また、ミサ・プツァは、トールの道路工事という力仕事を担ったり、寺院などの掃除をし、地域活動に力を入れており、トールに定着した。つまり、関係組織とミサ・プツァは相互利益関係になっている。ミサ・プツァの活動は、ミサ・プツァの関係組織から地位の安定性を保証してもらい代わりに、他組織の思惑を強く受け止め、他組織を支えている。

4-2-3. 内発的自助組織による女性及びコミュニティの変革、それによる震災復興への影響

前述したように、ネワール社会では、各トールは、男性が取りまとめ、男性組織グティがトール運営を行っており、女性の生活世界は、生家と嫁ぎ先だけという狭い範囲であった²⁸。しかし、ミサ・プツァが設立されてから、女性が外に出て活動を行うようになった。その第一歩が、女性たちにとって非常に大きな出来事であった。さらに、表2-②と表2-④の時期には、地域奉仕活動という女性たちの献身的な活動を行うことによって、トールにおいて重要な役割を担うことになった。女性たちの娯楽・親睦活動は、女性たちの互いの悩みを聞き

²⁸ 筆者が、40代ジャブの女性会員から「ミサ・プツァが設立される前のネワール社会」について質問したところ、次の回答を得た。

「ミサ・プツァができる前には、女性は、家の外の世界は何も知らなかったです。

トールの運営は、男性組織「グティ」が行っていて、何でも、男性だけで全てが行われていた時代でしたし、会員たちは、私より年配の人が多くて、ネパール語もわからないし、人前にもみんな恥ずかしがっていました。

NGOの支援で、女性のための生涯教育としてネパール語の読み書き、計算教室が、各トールで午後遅い時間に開かれていましたが、学習時間は短かったようです。

参加者は、子育てを離れた40歳以上の女性たちばかりで、メンタルが弱いために、学習してもなかなか覚えられないと言っていました。

CDSの職員は、そのような女性の弱い状況を変えたいと思って、当時地元NGOが養成していた女性自助組織を、職員たちの居住トールにも作れないかと、まず女性たちを集めて、毎月10ルピーの預金をするグループを養成したと聞いています。

最初は、毎月ミーティングにCDS職員が出向いて、話をしていたそうです。」

たり、個人的にも助け合い、絆を強める効果を持っている。ミサ・プツァが設立されるようになってから、ネワール女性の立場が急激に変化した。特筆すべきことは、女性・トールのニーズに応える形で行われていて、女性たちは全く意図せずして、伝統的な「ジェンダー構造」の変革が起こっているということである。女性のコミュニティにおける価値、評価が高まり、現在では、女性たちの活動を応援している人の方が多くなっている。さらに、女性たち自身の経営能力が経験を通して高まっている。

各トールの震災復興において、ミサ・プツァが主導して、住民に様々な事業を生み出している。図①～④の活動を見ると明らかだが、そこに至るまでに、ミサ・プツァは女性自身やトールのニーズを鑑み、それに応える活動を着実に継続的に行ってきた。そのおかげで、女性たちのプランニング能力と実行能力が間違いなく成長している。

4-3. 女性自助組織「ミサ・プツァ」持続のための運営資金獲得の模索

4-3-1. ミサ・プツァの諸活動（支出先）

はじめに、どんな活動のために運営費が必要なのか、ミサ・プツァが行っている主な諸活動についてみていきたい。ミサ・プツァの活動には次のものがある。

トールの住民を対象に、体操の講師やヨガの講師を呼んで、健康のために教室、歌とダンスの教室を定期的に（毎朝行っていることもある）開催している（講師への謝金が必要）。また、トールの一角で、ミサ・プツァの会員による住民のヘルスチェックを定期的を実施（月1回、医師のコミュニティでの診察の依頼をしており、謝金、物品費が必要）している。

また、「会員対象」で、能力向上トレーニング（人前でどうやって話したらいいのか、講師を呼んで学ぶ機会等）を設けたり、職業トレーニングでもあり、家庭でも役立つトレーニングとして、講師を呼んで、ベーカリートレーニング、洋裁トレーニング、ろうそく作りトレーニング（会員から要望があれば開催）などを実施している（講師への謝金、物品費が必要）。グループ基金のお金を使って、ミサ・プツァのユニフォームのサリーを作って会員としてのプライドと連帯感を強め（布代）、一緒に遠足に行ったり、宴会を行って楽しく過ごすことで絆を強めている（親睦費が必要）。

他には、ミサ・プツァは、トールで必要な諸経費の一部を提供している。トールの道路の舗装や寺院の修繕のため、会員の女性とトールの男性たちが一緒になって力仕事の作業を行っているが、その費用を支出している。トールの男性儀礼執行組織「グティ」で必要な諸経費をミサ・プツァのグループ基金から提供することもある。

4-3-2. ミサ・プツァの資金源（支援金とグループ経済活動）

はじめに、ミサ・プツァの公的支援金について述べる。CDSに登録されたミサ・プツァは、公的支援金を受け取れるが、毎年活動報告書を提出することが条件となっている。毎年ミサ・プツァ設立記念日には、それぞれのグループで祝賀会を開くが、その時に、CDS職員も招待することになっており、その時にCDSから祝金として5000ルピーを受け取れる。

続いて、女性たちの経済活動を概観していく。

まず、多くのグループでは、料理ケータリングの仕事をグループで運営していて、注文を受けると、儀礼用のネワール式の宴会料理を会員たちで作って、注文先まで届ける仕事をしている。他には、ミサ・プツァの会員が交代で、日用品や米、塩、砂糖などを会員価格で市

場価格よりも少し安価で販売する店を運営している。会員は、毎月そこで必ず購入する義務はあるが、安く購入もできて、グループの収入になっている。また、会員同士で製作したろうそくの販売（ネパールでは、2017年まで国家によって計画停電が行われていたため、ろうそくは日常必須品であった）をすることもしている。コミュニティの駐車場経営をしているグループもある。

それ以外には、「マイクロ・ファイナンス」で会員へのローン（融資）で出た利息の一部も、前述の支出のために使用している。女性自助組織が行う「マイクロ・ファイナンス」とは、本来は、女性の「ビジネスプラン」を担保として、グループ基金から会員のビジネス資金のために融資を行うものであるが、起業しようとする会員は少ないため、生活の突発的に必要となる費用（病院代、結婚費用、学費等）のために貸し出しをしている。

ミサ・プツァは、毎年、CDSから運営のための資金サポートもあるが、サポートでは不足している分を、預金の年利やグループの経済活動で出た収入から、女性たちの「娯楽」、「親睦」活動、様々なトレーニングに使用している。さらに、トールの寺院の修復費やグティの活動費として提供したり、男性たちへ融通することのできる「共有財産」を築いている。そのことが、女性たちの社会的な立場を強くし、地位を高めることに働いている。

また、ネパール大地震発生以後、このマイクロ・ファイナンスによる「トール共有財産」が役立ち、その中から、避難生活中に、住民たちの炊き出しに必要な食料を食料品店から購入することができた。ミサ・プツァのマイクロ・ファイナンスの仕組みを骨抜きにして、制度を借用して、女性の自立という目的に使用するのではなく、トールの住民のためになる共有財産を生み出している。ネパール社会では、個人の利益追求の資本主義の価値観では動いておらず、トールの発展を優先させている。

5. おわりに

本稿では、女性自助組織「ミサ・プツァ」の経営を長期的な視点で捉えることにより、組織内部や女性たち自身の変化・変遷、その過程におけるコミュニティの他の組織との関わり、コミュニティの変革、さらに、自然災害などの環境の変化に対応して、女性自助組織が、柔軟に変化する過程を分析することができた。

また、今回、組織経営の分析のために、金銭面にも着目したことにより、組織の経営維持のために、行政や外部からの助成金に頼るだけでなく、自らが収入を生み出す経済活動を行ったり、女性の経済的エンパワメントのために本来使用すべきはずのマイクロ・ファイナンスの利益をグループの活動費に充てたり、グループを超えて、トール（コミュニティ）の金銭問題解決のために融通していることも明らかとなった。そこから、彼女たちのコミュニティへの愛着や、一人だけが社会上昇するのではなく、仲間と共に地域ぐるみでの発展を願う彼女たち独特の発想についても理解することができた。ミサ・プツァの会員が、コミュニティも含めた幅広い視野を持って、必要な場所にお金を補充してやり繰りをしている面から見ると、トールの運営は、もはや男性たちだけのものではなく、ミサ・プツァが取り仕切っているようにも見える。このお金の流れが、女性たちの権限を強めさせ、伝統的なジェンダー構造の変革を起こしている一因となっていることも解明できた。

ミサ・プツァは、長いものだと 25 年以上の歴史を持つが、これから、若い人々が次々と入会していくのか、もしくは、女性たちにとって女性自助組織の役割は不要になるのか、今後、その経営はどのように変容していくのか、引き続き調査をしていきたい。また、これからは、ネパール国内の他地域や他国の女性自助組織と比較して、ネワール族の女性自助組織の経営の独自性についても探っていきたい。

参考文献

雨森 孝悦

2010 「東南アジアのマイクロファイナンス、マイクロ保険における営利、非営利——フィリピン、カンボジア、インドネシアの動向から」『日本福祉大学経済論集』41: 65-86。

石井 溥

1975 「ネワール村落のカースト・システム ネワール村落調査報告 2」『アジア・アフリカ言語文化研究』10: 83-143。

田尾 雅夫

2005 「NPO・ボランティア活動の経営管理」、川口清史・田尾雅夫・新川達郎(編)『よくわかる NPO・ボランティア』、pp. 110-111、ミネルヴァ書房。

竹内 愛

2007a 「ネパールの『ダサイン』祭にみられるネワール族のジェンダー構造変革の兆し」『多元文化』7: 207-224。

2007b 「ネパールにおけるネワール族女性の『新たな生き方』に関する文化人類学的研究——女性自助組織『ミサ・プツァ』をめぐる」『愛知県立大学大学院国際文化研究科論集』8: 135-164。

2009a 「ネパールにおける女性自助組織の展開と『メディエーター』——ネワール族農民カースト『ジャブ』に焦点を当てて」『ジェンダー研究』12: 5-28。

2009b 「研究報告：ネワール社会におけるカースト間・カースト内関係及びその変化——農民カースト『ジャブ』を中心に」『Autres』2: 101-117。

2010 「ネワール農民カーストの生活慣行からみる『浄・不浄』観と女性の位置づけ」『Autres』3: 13-30。

2013 「ネワール社会における女性自助組織とジェンダー・カースト構造の変化——女性の潜在的な変革の力とその具現化」『比較思想研究』39: 165-170。

2015 「研究ノート——境界論とネワール女性」『哲学フォーラム』12: 98-109。

2018 「ネパール大地震の復興過程に現れるジェンダー——パタン（ラリトプル市）の N トールを事例として」『Autres』9: 71-88。

マハラジャン, ケシャブ・ラル

2002 「カトマンズ近郊の都市フロンティア——パタン市の町形成を事例に」『三田学会雑誌』95(2): 31(221)-49(239)。

三瓶 清朝

1991 「ネパールのブラーマンの家庭におけるけがれと社会構造」『民族学研究』55(4): 383-405。

山上 亜紀

2001 「ケガレにまつわる観念とその諸相——ネパール・バフンの視点」『成蹊人文研究』9: 111-151。

2008 「米の象徴性——ネパール・ネワール社会における浄・不浄観念を中心に」『アジア太平洋研究』33: 59-78。

Drucker, Peter F.

1998(2007) *Managing the Nonprofit Organization*, Diane Pub Co. (『ドロッカー名著集4 非営利組織の経営』、上田惇生訳、ダイヤモンド社。)

Gellner, David N.

1996 *Monk, Householder, and Tantric Priest: Newar Buddhism and its Hierarchy of Ritual*, Cambridge University Press

Gellner, David N. & Pradhan, Rajendra P.

1999 “Urban Peasants: The Maharjans (Jyāpu) of Kathmandu and Lalitpur,” In Gellner, David N. & Declan N. Quigley(ed.), pp.158-185, *CONTESTED HIERARCHIES*, Oxford University Press.

Gellner, David N., Quigley, Declan

2003 *CONTESTED HIERARCHIES*, Oxford University Press.

Takeuchi, Ai

2012 ‘A case study of the social impacts of the activities of Newar farmer caste women, through women’s self-help organizations “Misa Pucha” in Nepal’ 『比較マイノリティ学』3: 91-109。

2013 ‘A case study of the change and influence of women’s self-help organizations *misa puchas* in Patan, Nepal’ 『共生の文化研究』8: 99-113。

Toffin, Gerard

2007 *NEWAR SOCIETY City, Village and Periphery*, Himal Books.

Keywords

Newar, the farmer caste group *gyapu*, gender structure, women’s self-help organization *misa pucha*, management